

令和2年度 第1階 上京区まちづくり円卓会議（まちの活力部会）摘録

日 時： 令和2年7月30日（木） 午後7時から午後9時まで

場 所： 上京区総合庁舎4階 大会議室1・2

出席者： 【学識者】

新川議長 ※ 欠席：吉田委員

【円卓会議委員】

富家委員，坂本委員，舞鶴委員，松本委員，益山委員，松田委員

※ 欠席：川田委員

【区役所等】

林区長，三谷室長，高橋課長，山下課長，石井係長，西川担当，松井まちアド，加藤まちアド，アルパック（渡邊）

1 議題

（1） コロナ禍による価値観等の変化について

委員 新型コロナウイルス感染症により，子どもの学校スケジュールが変化した。これからは，全員一律の対応から個別の対応に変えていく必要があると思う。

コロナによって活用が本格化しているリモートについては，今後も継続してはどうかとの声もあるが，顔と顔を突き合わせることの重要性も感じている。

委員 所属している団体活動の一環で，コロナ禍でもできるイベントについて大学生と議論しているが，今年は，リアルでのイベント開催を望む声あまり出ていない。

地域のイベントがインターネットの世界になっていくのはある程度仕方ないが，それに乗っていない人もいる。個人的には，コロナ禍の今は，外との交流ではなく，内の人たち同士の交流が大切なのではないかと感じている。

委員 新型コロナウイルス感染症に対する様々な国の施策が行われているが，何をしようとしているのかわからないことが多々あり，距離感を感じるがあった。

国といった大きな単位ではなく，上京区くらいの単位で生じている問題点等であれば，行政と市民が近い距離感で考えることが出来ると思うので，市民が地域に関心を持つきっかけを作ることができるのではないかと。

委員 所属している団体では，「京都の魅力発信」を目的に活動している。上京区の活性化に向けて上京の歴史文化の発信にオーバーラップするものがあるので頑張りたい。

先程お話しがあったハイブリット（リアルとリモート）発信については，大きな社会の流れの中で発信形態が変化している中であって，どれかひとつではなく，併用していくことが必要である。そうすることで，リアルとリモートの両方で参加できるようになり，これまで参加できなかった若者等の参加が期待できる機会が生まれると思う。新型コロナウイルス感染症を契機として，新しい時代の魅力発信の在り方を模索したいと考えている。

委員 コロナ禍での生活を経験し，地域での声掛け，「体は大丈夫か。」地域での声掛けが増えたように感じている。逆に，地域行事や集会等が全く無くなり，みんなで一緒にやる行事が無くなったことは残念に思う。人は顔と顔を突き合わせてコミュニケーションを取るべきだと思う。これが少なくなっていることは寂しく，コロナが来年も続くとうなるのか危惧している。

委員 コロナ禍の活動では、リモートを活用することで参加率は上がったとを感じるが、人と人とのコミュニケーションや団結力がなくなってきたと感じている。みんなで何かやる時には集まってひとつの空気の中に入ることが大事。

観光についてだが、京都市内では、観光客が減少している。京都は観光のまちであり、旅館の経営者等が大変な思いをされていることを危惧している。

(2) **資料3** 方針1及び2について、加筆・修正が必要な項目等について

委員 計画案の記載についてだが、もう少し具体的な取組があると良いのではと感じた。

特に、方針2の取組1「西陣をはじめとする地域ならではの産業の魅力発信」については、もう少し具体性がないと取り付きにくい感じを受けている。

取組2の下部に記載のある学生を対象とした「リーディングプロジェクト」については、非常に良い取組だと思う。京都には多くの学生がいるので、上京区での様々な行事等について、さらに門戸を開放していくことが必要であると感じている。

委員 コロナにより学区の行事がなくなっている。本計画の推進についても、コロナ禍では難しいのではないかと思う。

委員 計画の推進に当たっては、NPO等との連携も考える必要がある。上京区で観光関係の取組をするに当たっては、「拠点がない」という問題があると感じている。拠点づくりにNPO等が協力できないかと考えている。上京区内にあるお寺や空き家を活用し、地域、行政及びNPO等みんなが共有できる価値を生み出す取組が必要である。

委員 西陣関係の仕事をしているが、新しい販路開拓が課題となっている。

例えば、大阪では、行政とファッション業界が連携し、ビジネスマッチングを行っている。地域産業や地域企業にとっての相談所の設置が望まれる。

計画案に記載されている魅力発信の対象が、業者か一般なのかを明確にした取組が必要である。

委員 計画の策定に当たっては、具体的な書き方が必要ではないか。

例えば、商店街振興で言うと、商店単独では人を呼び込めない。一気に空き店舗に新しい店舗を入れるといった施策が必要ではないかと思う。こういったことは単独ではできないので、行政や大きな組織と連携する必要があるのではないかと感じている。

「リーディングプロジェクト」には、「町家居住」等をテーマにしたまち歩きの実施と記載されているが、上京ならではの「路地」をテーマにすることも必要である。

委員 所属団体の活動で、大学生の取組を伴走支援している。

大学生の就職について言うと、卒業後に京都に残る学生がほとんどいないのが現状である。

一般的には、学生の就職活動では、いい会社やステータスを重視する学生が多いが、一緒に活動している学生の中には、「地域の役に立ちたい。」といった考え方を持っている学生もいる。こうした学生をつなぎとめる方法を考えている。

そのためには、単に仕事としてマッチングさせるのではなく、企業側から地域への思いや魅力を表現する必要があるのではないか。

例えば、京都の企業が学生の取組に協賛等を行うことで、「地域のために役に立ちたい。」といった考え方の学生が、そうした企業を就職先として選ぶ可能性がある。

計画的の策定に当たっては、企業が学生の活動に温かい形で関わるができる表現が必要ではないか。

(3) **方針3** について、加筆・修正が必要な項目等について

委員 方針3の取組2では、「学生主体のまちづくり」と記載されているが、主体は地域だと思う。学生

と地域が絡む連携するという方向が良いと思う。

委員 学生が地域で活動するには「楽しむ」必要がある。「楽しい」というためには、自主的、自発的な要素が不可欠であり、学生主体の概念は残した方が良いのではないか。

委員 所属している団体では、月1回、無償でお寺や神社の美化活動をしている。現場ではお寺での生活様式等を実際に見ることができる。歴史を実際に現地で体験できる機会となるので、学生にも声掛けをしていきたい。

また、コロナを踏まえてリモートでの活動が盛んになっているが、全員がこうしたものを活用できるわけではない。リモートを使えない人を切り捨てない工夫や思いやりの心を忘れてはいけない。

委員 学生については、主体的に参加する学生だけではない。中には1日だけ参加したいといった学生もいる。主体的に取り組む学生が全てではないことを付け加えておく。

委員 学生を巻き込むことは賛成だが、学生にいきなり考えてくださいと言うと困る学生も多いと思う。

方針3や4に記載されている内容は、これまでから実施していると思う。新しい取組も良いが、地域で既に取り組まれていることの底上げが必要ではないか。

例えば、上京区ならではの「寺社仏閣での美術品の展示」や「西陣マルシェ」等では、規模を拡大して知名度を上げつつ事業を濃い内容にしていく取組が必要ではないか。

委員 最近の学生は忙しい。方針4に記載のある「語り部活動」や「まち歩き」はこれまでから取り組んでいる。こちらから上京の魅力を全国に発信しに行くことも考えている。

委員 計画案に記載のある取組は、行政だけがやるのではなく、上京区内にある様々な団体と連携した取組が必要である。各団体が持つ上京区に係る情報を集約・網羅する仕組みや発信の仕方があっても良いのではないか。

議長 本日の議論を踏まえて大きく3点、感じたことをお話ししたい。

大きな1点目として、コロナの流行を地域がどう受け止めているのかという話があった。その中で、コロナの影響は、地域やそれぞれの住民にとって、その現れ方が違ってきているということ。それを一括りに自粛や感染防止といった観点で議論するのは成り立たないと感じた。

特に、これからのウィズコロナの時代にあって、それぞれの暮らし、地域が置かれている条件に合わせたウィズコロナの過ごし方を創り上げる必要がある。上京らしい新たな暮らし方「上京方式」といったものがあっても良いと感じた。

また、コロナにより急速に普及しているオンラインについても、直接会えなくても交流ができる、時間や空間を越えて交流できる便利な側面がある一方で、こうしたコミュニケーションの限界や、対面の重要性に気付いた方も多いと思う。そうしたことが地域のつながりを見つめ直すきっかけになったのではないか。

ただ、経済産業面で言うと、感染症の流行は、観光業等にとっては大変な側面があり、リモートの環境と対面の良さを組み合わせて考える必要があるというのが今日の結論であった。

大きな2点目としては、本日多くの御議論があった地域が直面している課題であるが、地域における人と人との関わりや、お互いの関係が薄くなっているということであった。若い人たちも積極的に関わってくれていないという問題もあった。こうした状況を、どのように組み立て直すのか考える必要がある。

大きな3点目として、これからのまちの活力を考えるうえで、大事なことの1つとして、上京のまちで生き生きと暮らすためには、まちの賑わいが必要であるということ。

賑わいがあるお店、商店街、イベント及び日々の交流から生まれるそうした賑わいをつくること、そうした場での普段の会話による交流は大きな価値や意義があることに気付いた。

大事な2つ目として、この地域にある様々な力や宝を上手く結び付けきれていないのではないかと。それは、若い学生と地域の活動、または事業者の活動が上手に結び合わされていない

し、そういった機会も少ないということ。それは、単に学生が就職をするとか、単にお互いを知ること以上に、もっと自分たちの暮らしに深く関わっていて、お互いに知り合うことで、もっと豊かな暮らし方や暮らしの中で多くの選択肢を手にすることができるマッチングの仕方が鍵になるという話があった。

その際には、分厚いお世話ではなく、軽いフットワークで「こんなもの、あんなものもあるよ。」というきっかけを提供し、様々な機会を通じて軽やかに刺激し合いながら、良い組合せを創るマッチングの場が求められているのではないかと感じた。

そうした取組を通じ、事業者も元気になるし、学生も就職の場や地域の活動の場を見つけ出していくのではないかと感じた。

そうしたマッチングにより「まちの活力」を創っていくうえで重要なこととして、大事な3点目であるが、地域にある文化や資源（歴史、まち、路地及び空き家等）といった種をもっと活用し、そこを活動の拠点、あるいは地域や企業との出会いの場とすることで、新しいものを生み出していくような地域資源の活用が大事であると感じた。

これからの上京がどんな姿になるのかを考えるうえで大事なものは、まちの活力は、若い人からお年寄りまで、みんながまちの中で元気に暮らし、そこで様々な事業や生業が成り立ち、地域の中で一緒に生き合う姿を基本とした時に、コロナ禍でも十分に耐えていくことができる上京にある力を発揮できるのではないかと感じた。

以上